

オバマ訪問後の「原爆の日」

ジャーナリスト

松尾 文夫



真夏の太陽のもと、また広島・長崎の悲劇を想う日々がめぐってきた。特に今年5月に、オバマ大統領によって、現職の米大統領としては初めての広島原爆慰霊碑献花が実現しただけに、余計に想いは深まる。しかし、その内容にはどこぞん空しさがつきまとう。

まず第一に、私自身が現場にいたオバマ大統領の広島献花自体、今振り返れば、大統領が7年前のチェコ・プラハ演説で高々と宣言し、「ノーベル平和賞まで手にした「核兵器なき世界」を、残り8カ月を切った自らの任期中には到底実現出来ない現実を静かに認める「儀式」だったと思う。

大統領が広島平和記念公園内に滞在した時間がわずかに5分、彼自らが演説の冒頭で「人類が自らを破壊できる手段」と表現した原爆の悲惨な被害に直接触れる機会だった原爆資料館(平和記念資料館)訪問は10分足らず。しかも、そのかなりの時間を持参した折り鶴の贈呈に割いたとみられる。この原爆の直接の被害と正面から向き合うのをあえて拒んだ態度に、オバマ大統領の個人としての「無念さ」が浮き彫りにされていたと思った。

最初、4分足らずと予告された演説だけは格調高く、17分と長かった。しかし、「きのこ雲」が象徴した科学技術の進歩に道徳的な革命が追いつかない「人間性の中にある根本的な矛盾」がいまだに、「国家間のあらゆる攻撃的行動、いわゆるテロ、腐敗、残虐性、抑圧」を生んでいる現在の世界の姿を分析し、その絶望感を率直に披露した。

そして最後は、広島と長崎の被害者たちに勇気を持って「核兵器なき世界」の実現を訴え続ける「道徳心の目覚め」を呼びかけて終わった。大統領が、顔色一つ変えず淡々と語ったのが印象的だった。

7年前のプラハ・フラツチャニ広場を埋めた大観衆の興奮は、どこにもなかった。広島平和記念公園はどこまでも静寂に包まれていた。被害者への「対面」も限定的で、短く、とにかく、あまりにも時間が

国際情勢 急激に悪化

今、核軍縮には米口軍縮交渉の行き詰まり、北朝鮮の核開発など希望を持てる動きは、何一つない。献花後、米議会の力が及ばない大統領権限だけで一方的にオバマ大統領が「米国の核先制不使用宣言」に踏み切るかもしれない、との新聞報道が流れた。しかし、その真偽のほどは明らかでない。

第二に、オバマ大統領の広島献花後の国際情勢の急激な悪化である。直後に起こった欧州そして世界全体を揺るがしたイギリスのEU(欧州連合)離脱、フランス・パリ、ベルギー・ブリュッセルからアメリカ、バンクーバーまで

「核なき世界」の実現遠く

まつお・ふみお 1933年 東京都生まれ。学習院大卒。共同通信ワシントン支局長、論説委員、共同通信マーケティング社長などを経て2002年からアメリカ専門のジャーナリストとして活動する。04年、「銃を持つ民主主義」「アメリカという国」のなりたち」で日本エッセイスト・クラブ賞。著書に「ニクソンのアメリカ」「オバマ大統領がヒロシマに献花する日」など。

飛び火し、再び欧州にまで戻る世界的なイスラムテロの恐怖、そして米大統領選挙戦での「異色の候補」、ドナルド・トランプ氏の共和党候補指名獲得など、現実の国際政治はただならぬ展開を見せているからである。リオデジャネイロ五輪は、銃むき出しの厳戒体制の中で始まった。

とりわけ、9月から本格的な選挙戦が始まる今年の米大統領選挙戦では、「米国の利益第一主義」の立場から、NATO(北大西洋条約機構)、日本などとの同盟コートの見直し、日本、韓国の核武装容認まで口にするトランプ候補の支持基盤となっているのが、オバマ政権下で好調な経済のもとでも、いぜん拡大を続ける所得格差にあえぐ人々である。一つだけ数字をあげれば、米国の上位10%と下位10%の所得格差は1980年代には11倍だったが、2013年には約19倍にまで拡大している(経済協力開発機構OECDの資料)。これにいら立つ白人層が最大の支持者だ。

それに民主党の候補指名争いで、白人の学生が結集し、最後までヒラリー・クリントン氏を苦しめ、そのほとんどの主張を受け入れてかろうじて全国党大会での大同団結を演出してきた「社会主義者」バーニー・サンダース氏と、トランプ氏の支持者は、格差拡大の被害者という点で同根であることを忘れてはいけない。この格差反対のもつ社会的エネルギーはイギリスのEU離脱を生んだ原動力、さらにテロの温床ともみられており、今、世界的な広がりを持つ。

オバマ大統領は全国党大会でのヒラリー・クリントン氏応援演説で、広島とは対照的に涙までにじませて、自らを黒人初の大統領として生み出したアメリカの多様性を賛美し、その延長で初めての女性大統領の誕生を呼びかける「米国はすでに偉大である」との熱弁をふるった。この米国偉大論とトランプ氏の「米国をもう一度強くしないとイケない」という米国衰退論と衝突するのが今年の選挙である。その結果いかに米国のみならず、「核兵器なき世界」の行方を左右することになる。

最後に日本が置かれている立場について触れておきたい。オバマ大統領が広島献花の後の演説で、原爆犠牲者のみならず、あの戦争の犠牲者全てを追悼すると述べ、

日本流に言えばお線香をあげる儀式を済ませた以上、安倍外交がアメリカ人にとってはあの戦争の不幸な記憶を象徴するハワイ・真珠湾のアリソン記念館での献花をいつ実現するかという課題が残る。安倍首相は昨年の米上下両院合同本会議での演説で、この日米和解の儀式は終えているとの認識だという。

しかし、和解の儀式は何度繰り返してもいい。オバマ大統領の広島献花に対して、即座に「日本は加害者という立場を忘れてはならない」とくきを刺した中国をはじめとする東アジア諸国の冷たい目を考えれば、思い切った多角的な献花外交を展開するべきだと改めて提案する。

日本軍による渡洋爆撃により1万人を超える犠牲者を出した中国・重慶、一定数の民間人の殺害があったことを日本側も認める南京での献花、そして韓国には昨年末の合意の履行が最終段階を迎えている従軍慰安婦問題での新たな「首相書簡」などなど。大小の舞台にはことかかない。

安倍首相が異例な友好関係を持ち、今秋にもウラジオストクでの会談が伝えられているプーチン・ロシア大統領には、ハバロフスクにある推定5万人のシベリア抑留日本兵や民間人の死者を追悼した「日本人死傷者慰霊碑」への献花をぜひ実現するよう、求めてほしい。

日本外交にとっては、大きなチャンスを与えてくれたオバマ大統領の広島献花である。

多角的な

献花外交を

最後に日本が置かれている立場について触れておきたい。オバマ大統領が広島献花の後の演説で、原爆犠牲者のみならず、あの戦争の犠牲者全てを追悼すると述べ、